



司
第八十七号

114
A 2686



別依司法省何區裁判所將招
假規則及審議之要旨異概呈之
也

明治六年七月廿日

左記事務係裁
答後波友象之序

太政大臣三條實美殿

大正
十一年四月
侯爵郵寄
贈月

3933

3933



大正十一年四月
大隈侯爵郵寄附

區裁判所訴訟假規則之儀ニ付伺

區裁判所之儀ニ兼テ伺濟相成居候就テ既ニ
各縣在來ノ支廳ニ區裁判所ニ引直シ現地裁
判致シ居候處未ダ訴訟手續等一般ノ定則
之レナク裁判上差支不尠候ニ付今般佛教師ト
會議ノ上佛國治安裁判所方法ヲ照酌シ別冊
ノ通假規則取調申候尤東京ハ差向キ各大區
警視出張所ヲ以テ區裁判所ト為シ其局ヲ分テ

司
第八十七号

七月

批ハ号

去
自

民事ノ訴訟ヲ裁判致シ其他各地方ハ追テ
取設相成度仍テ右條規則奉伺候間至急
御評決有之度候也

明治六年七月廿日

司法大輔福岡孝資

三條太政大臣殿

訴訟法假規則

區裁判所

天正十一年四月
讓侯爵寄贈

訴訟法假規則

第一卷 區裁判所構成

第一章 總規則

第一條 東京府中分テ六裁判區トス每區ニ
裁判所ヲ置ク左ノ如シ

第一區裁判所

第二區裁判所

第三區裁判所

司法省

第四區裁判所

第五區裁判所

第六區裁判所

第二條 他府縣ハ其地方ノ便宜ニ循ヒ裁判

區ヲ定ム可シ

但シ區ハ二府及ヒ人民輻輳ノ地ハ大凡

口二万ヨリ少カラス十五万ヨリ多カラス

其餘ノ地ハ六千ヨリ少カラス二万ヨリ多

カヲサレ可シ

第三條 各區裁判所ニ裁判官正副各一員書記

官正副各一員使丁一員副役二員ヲ置ク可シ

第二章 裁判官

第四條 區裁判官ハ事ヲ偏頗ナク裁判シ法律

ハ嚴密ニ執行フニアリ

區裁判官ハ一人ニテ訴訟ヲ裁判ス可シ

第五條 所長裁判官若シ病氣又ハ不在及ヒ他

ノ故障アル時ハ其副員之ニ代リテ勤ム可シ
第六條 所長裁判官及副員共ニ病氣又ハ故障アル時ハ其區裁判所ヲ管轄スル府縣裁判所ヨリ其區最近ノ區裁判所へ原被告人ヲ送付ス可シ

第七條 其府縣裁判所ハ原被告人ノ願ニヨリ且檢職ノ存意ヲ聽キタル上區裁判官ノ裁リ替ヘテ決シ可シ

第三章 書記官

第八條 書記官ハ裁判言渡書ヲ記シ之ヲ管守ス其言渡書ハ裁判官及書記官之ニ調印シテ簿冊ニ編シ其寫ヲ以テ原被告人ニ付與ス可シ

第四章 使丁

第九條 區裁判官聽訟ノ時ハ使丁必ス出席シ前訟人ヲ順次ニ呼込ニ及テ裁判官ノ命ニ從

ト公庭ノ取締ヲ為ス可シ

第十條 使丁ハ訴訟法式ニ依テ呼出状ヲ申達

ス可シ且ツ原告人ノ願ニ准テ被告人ノ住所

ニ至リ總テ訴訟ニ付テ直達ヲ為スヲ得可シ

第十一條 使丁ハ其勸ムル所ノ區裁判所ノ關係

スルコトニ非サレハ呼出状等ノ唇類ヲ作為スル

コトヲ得ス

第十二條 使丁ハ第七十一條ノ定則ニ准テ其

取タル唇類ノ手数料ヲ受取り唇記局ハ

納ム可シ

第十三條 使丁ハ其府縣裁判所ノ檢職之ヲ

監察ス故ニ使丁ノ取タル唇類ハ何時ニテ

モ之ヲ検査スルコトヲ得可シ

第二卷 區裁判所管轄ノ事

第一章 権限ノ事

第十四條 區裁判官ノ裁判ス可キ訴訟ハ身分

及、動産ニ関スル争論ニ限ル可シ但シ元金
額貳拾五圓迄ハ控訴スルコトヲ得、元金額貳
拾五圓ヲ踰ヘ壹百圓迄ノ許諾ハ裁判スト雖
モ控訴スルコトヲ得可シ

第十五條 區裁判官ハ旅宿ノコトニ付旅人、旅
店ノ主人トノ間ニ起リ又ハ運送ノコトニ付テ旅
人ト船主及ヒ車馬主トノ間ニ起リタル争論ヲ
即時裁判ス可キ場合ニ於テハ裁判スルヲ得ヘ

シ元金額貳拾五圓迄ハ控訴スルコトヲ得
元金額貳拾五圓ヲ踰ヘ五百圓迄ノ許諾ハ
裁判スト雖モ控訴スルコトヲ得ヘシ

第十六條 總テ物ヲ借リ或ハ利益ノタメ物ヲ借リタ
ル貸銀拂方ニ付テノ許諾貸シ場所ヨリ借主ヲ
退クルコト及ヒ借金ヲ拂ハシムルコトニヨリ既ニ貸主
引當シ物ヲ取押シテ承諾セシムルコトノ許諾ハ
右一ケ年ノ借賃元金額五拾圓ニ踰ヘサレハ

區裁判所ノ管轄ニ歸ス

但シ元金額貳拾五圓迄ノ訴訟ニ付テノ裁

判ハ控訴スルコトヲ得ス元金額貳拾五圓ヲ

踰エル訴訟ノ裁判ハ控訴スルコトヲ得可

シ

第十七條 左ノ件々ハ區裁判所ニ於テ裁判ヲ為

ス可シ

第一 田畠菓實及ニ收納物ニ人畜ヨリ為

シタル損害ニ付テノ訴訟又樹木植籬ノ

枝根剪除及ニ溝渠ノ浚ニ管スル訴訟

第二 物借り或ハ利益ノため物ヲ借りタル

ヲ問ハス借り用ヒシコトニ因テ生ゼシ損

害ノ修費ノ雜費ハ法律ニ滯テ借人ノ雜

費ナル可キ場合ニ於テハ右雜費借主ヨ

リ拂テ可キヲ裁判スル事

第三 雇人雇エト其使用スル主トノ條約

ニ付テノ學論

第四 口上ヲ以テ人ニ汚名ヲ與ヘ又ハ惡口

ヲ為シ又喧嘩及ヒ人ノ身体ニ防ケヲ為

シタルニ付損害ノ償ノ誹訟

但シ元金額貳拾五圓迄ノ誹訟ノ裁判ハ控

訴スルヲ得ス元金額貳拾五圓ヲ踰ユル誹

訟ノ裁判ハ控訴スルヲ得可シ

第十八條 毎年或ハ毎月ノ養料ヲ受ク可キ權利

ヲ有スル者ヨリ其養料ヲ受ツル為メノ誹訟ハ

其一年ノ金額三十圓迄ハ裁判スルヲ得ヘ

シ

但シ右裁判ハ控訴スルヲ得可シ

第十九條 被告人原告人ニ對シテ誹訟ヲ為ス

之ヲ反對誹訟ト云フ

反對誹訟ノ金額區裁判所ノ権限内ナル時ハ

假令原被告人ノ誹訟ノ合セ金額右権限ヲ過

クルト雖モ之ヲ裁判ス可シ

但シ原被告人訴訟ノ内一方ノ金額貳拾五圓
ヲ過キ終審スルコト能ハサル時ハ双方共始審
ノ裁判ヲ為ス可シ

第二十條 何レノ裁判ニテモ其言度各ニハ必キ其
始審又ハ終審ナルコトヲ記ス可シ

第二十一條 裁判ヲ控訴スル者其區裁判所ヨリ
八里ノ距離内ニ住居スル時ハ裁判言渡セシ

日ヨリ三十日ヲ過クル後之ヲ為ス可カラズ
其八里ノ距離外ニ住居スル時ハ八里毎ニ一日ノ
猶預ヲ増ス可シ

第二十二條 控訴ヲ為ス者ハ其區裁判所ヲ管轄
スル府縣裁判所ニ訴出ツ可シ

第二章 勸解ノ事

第二十三條 和解ヲ為スヲ得可キ者和解ヲ為ス
ヲ得可キ物件ニ付キ主タル訴訟ヲ為シ始メ

ソトスルニハ原告人預メ被告人ヲ區裁判所ニ勸
解ノ為メ呼出シ又ハ双方ノ者勸解ヲ得ン為メ已
レノ意ヲ以テ區裁判所ニ出席シタル後ニ非レ
ハ區裁判所及ヒ府縣裁判所ニテ其訴訟ヲ為ス
コトヲ聽カス

第二十四條 區裁判官ノ主務ハ原被告人ノ争
論ヲ和解セシムルコトヲ勸ムルニアリ但シ其勸
解ヲ承諾スルコトハ双方ノ自由ニ任カス

第二十五條 其勸解ノ為メニハホタ本訴訟ト
ナラサル前ニ書記官平常ノ昼間ヲ以テ日
時ヲ定メ被告人ヲ區裁判所ニ呼出ス可シ
其定メタル日時ニ至リ原被告人ハ自身又ハ
委任シタル名代人ヲ以テ區裁判所ニ出テ各
其所存ヲ述フ可シ
區裁判官ハ双方ヲ威懼セシムルコトナク勸解
スルコトニ注意ス可シ

第二十六條 被告人出席セズ或ハ雙方勸解調
 ハサレ時ハ區裁判官其勸解不調ノ証昏ヲ作
 リ其場ニテ調印シ原告人ニ渡ス可シ
 右証昏ハ原告人本訴詔ニ付被告人ノ呼出ヲ
 乞フ時之ヲ使丁ニ示ス可シ使丁ハ詔庭呼
 込ノ時右証昏ヲ呼出状ノ本昏ニ添ヘ昏記官
 ニ差出ス可シ

第二十七條ニ記シタル場合ヲ除クノ外何レ

ハ呼出状ニテモ勸解不調ノ證昏ヲ添ヘサレハ
 昏記官第六十條ニ准ヒ為ス可キ件々ヲ
 明細表ニ昏入ル可カラズ

第二十七條 勸解ヲ為スニ及ハスシテ裁判ス
 可キ訴詔ハ左ノ如シ

第一 官有ノ地或ハ區内公ケノ建造物或
 ハ幼者又ハ行権ノ禁ヲ受ケタル者ニ関
 シタル訴詔

第二 第五十八條ニ記載シタル保証人ニ
付テノ訴訟

第三 三人以上ニ對シテ為シタル訴訟

但シ右三人ノ關係同一ナリト雖モ亦同

シ

第三卷 區裁判所訴訟ノ手續

第一章 呼出ノ事

第二十八條 區裁判所ニ呼出狀ニハ原告人

ノ住所職業姓名并ニ使下ノ姓名被告人ノ住
所職業姓名ヲ記シ訴訟ノ趣意ヲ略記シ且裁
判ス可キ裁判官并裁判所ニ出席ス可キ日時ト
呼出狀ヲ出シタル年月日トヲ記ス可シ

第二十九條 身分又ハ動産ノ事ニ付テノ訴訟
ハ被告人ノ其住所ノ區裁判所ニ呼出シ若シ
被告人ノ住所分明ナラサル時ハ其寄留スル
所ノ裁判所ニ呼出ス可シ

第三十條 左ノ件々ニ関スル訴訟ニ於テハ
争ノ生シタル物件所在ノ地ノ區裁判所ニ被
告人ヲ呼出ス可シ

第一 田畠集實及ニ收納物ニ損害ヲ為シタ
ル丁ニ関スル訴訟又樹木植籬ノ枝根剪除
及ニ溝渠ノ浚ニ関スル訴訟

第二 借主ヨリ為ス可キ修履ノ訴訟第十六條
見合

第三十一條 呼出狀ハ被告ハ現住所ノ區裁判所ノ

使丁之ヲ申達ス可シ若シ其使丁故障アル時
ハ裁判官ヨリ任シタル者之ヲ被告人ニ申達
ス可シ右呼出狀ノ寫ヲ被告人ノ方或ハ被告
人不在ノ時ハ被告人一へ達スル為メ之ヲ其家
人ニ渡ス可シ若シ其住所ニ人アラサル時ハ
右ノ寫ヲ使丁ヨリ戸長ニ預置キ戸長ハ本屆
ニ檢印ヲ為ス可シ
但戸長ハ其寫ヲ被告人ノ方ニ達ス可シ

第三十二條 區裁判所ノ使丁ハ己レノ本系專
屬卑屬ノ親且兄弟姉妹又ハ兄弟ノ妻并妻
ノ父母兄弟原告人タル時其者ノ為メニ呼出
状ヲ送達シ且其諸務ヲ執行トヲ得ス

第三十三條 呼出ヲ受クル者裁判所ヨリ八里
ノ距離内ニ住スル時ハ呼出状送達ノ日ト裁
判所、出席ス可キ日トノ間ニ少クトモ一日
ヲ猶預アル可シ若シ呼出ヲ受クル者八里ノ

距離外ニ住スル時ハ八里毎ニ一日ノ猶預ヲ
増ス可シ

但シ至急ノ場合ニ於テハ裁判官其猶預
ノ日限ヲ減スルトヲ得可シ

第三十四條 原被告人雙方己レノ意ヲ以テ區
裁判所、直ニ詢ヘ出ルトヲ得可シ

右ノ場合ニ於テハ裁判官法律ニ定テリタル
通り之ヲ始審シ又ハ終審シ又ハ雙方協議ノ

上願ニ因リテハ其争論ヲ終審ス可シ

但シ雙方ノ住所ノ地或ハ争ノ生シタル物

件所在ノ地ノ事ニ付テハ其争論ヲ裁判ス

可キ裁判所ニ非スト雖モ雙方願ノ上裁

判官ハ本條ノ如ク裁判ス可シ

右原被告人ノ願ヲ陳述書ハ雙方之レニ調印
ス可シ

第二章 聽訟ノ事

第三十五條 區裁判官至急ノ場合ニ於テ

ハ休日ト雖モ聽訟ス可シ

第三十六條 聽訟ノ前遲リ凡ニ時閉ヲ隔テ

使丁ヨリ呼出状ノ本屆及テ勸解不調ノ証屆

ヲ書記官ニ差出ス可シ

第三十七條 原被告人ハ呼出状ニ定メリタル日

限或ハ第三十四條ニ循ヒ互ニ定メタル日限ニ

至リ區裁判所ニ自カラ出テ或ハ代人ヲ差出ス可シ

第三十八條 原被告人ハ裁判官ノ面前ニ於テ
言語ヲ慎ミ裁判官ニ對シ為メ可キ尊敬ヲ守
ル可シ不シ之ヲ守ラサル時ハ直チニ之ヲ譴
責シ再犯ノ者ハ貳圓ヨリ多カラサル罰金ヲ打
ス可シ

第三十九條 裁判官ヲ罵ル時ハ裁判官之ヲ口唇
ニ為シ且犯人ニ三圓ヨリ多カラサル罰金ヲ直
チ言渡ラ得可シ

第四十條 裁判官ハ原被告人ノ陳述スル旨
ヲ聽キ直ニ裁判ヲ言渡シ或ハ次ノ日ニ之ヲ言
渡ス可シ尤モ場合ニヨリテ必要ト思フ時ハ
証書類ヲ差出サシメ其裁判ヲ七日ノ間延引
スルヲ得可シ

第四十一條 何レノ裁判ニテモ言渡ハ唇記官
之ヲ裁判言渡簿ニ記載シ概リ裁判官
及ヒ唇記官之ニ押印ス可シ

第三章 欠席裁判及こ裁判不服

第四十二條 裁判ノ為ニ定メタル日限ニ至リ原

被告人ノ内一方出席セサル時ハ其終ニテ裁判
ヲ言渡ス可シ之ヲ欠席裁判ト云フ

第四十三條 欠席裁判言渡サレタル者ハ其言

渡ノ日ヨリ三日ノ間ニ其裁判ニ服セサルヲ
趣ヲ申述フルヲ得可シ之ヲ裁判不服ト云フ
右不服ヲ述フル者ハ一方ノ者ヲ呼出ス日限ヲ

記入ス可シ

但シ右呼出ハ第三十三條ニ循フ可シ

第四十四條 欠席シタル者后シ不在或ハ重病ニ

ヨリテ其訥諾ノ手續ヲ知ラサル者ヲ証スル
時ハ右ノ時間ニ拍ハラス裁判不服ヲ申立ソ
ルヲ得可シ

第四十五條 裁判不服ヲ申立テソル上再度欠席

裁判言渡サレタル者ハ再ニ裁判不服ヲ申立ツ

ルヲ得可カラス

第四章 預審裁判及其行ニ方

第四十六條 裁判官ハ詢詔ノ始末ニ付テ裁判
確定セサル前ニ物ノ鑑定或ハ取調ヘ或ハ
所ヲ検査スルヲ申付ルヲ得可シ之ヲ預審裁判ト
右ノ場合ニ於テハ原告人ニ其事ヲ為ス可
キ日時及ヒ裁判所又ハ其場所ニ出ツ可キ
言渡唇ニ記ス可シ

右言渡唇ヲ讀ムトシタル時ハ後ニ裁判所又ハ
其場所ニ出ツ可キノ呼出狀ト見做ス可シ

但シ此場合ニ於テハ第七十條ニ記載シ
タル如ク執行公寫ヲ渡スニ及ハス

第四十七條 預審裁判ニ對シテハ控訴ス可ラス
但シ確定裁判ノ後ハ之ヲ控訴スルヲ得可

第四十八條 若シ預審裁判言渡ニ於テ鑑定ノ

申付ル時裁判官ハ定メタル鑑定人ヲ呼出ス
為メ申付状ヲ原告ハニ與フ可シ
右申付状ニ於テハ鑑定ノ為メ定メリタル場
所日時及ヒ鑑定ニ付テノ預審裁判言渡ノ大
面ヲ記入ス可シ

第四十九條 裁判官若シ取調及ヒ検査ヲ申付
ル時ハ其事ヲ為ス為メニ出ツ可キ証據人ヲ呼
出スノ申付状ハ預審裁判言渡ノ月日及ヒ証

據人出ツ可キ場所及ヒ日時ヲ記ス可シ

第五章 証據人ヲ以テ事實取調ノ事

第五十條 訴訟中ノ事件ニ付原被告人異論
アル時其事件証據人ヲ以テ証スルヲ得可キ
トニシテ裁判官ハ其証ス可キトヲ肝要又ハ証
支ナキト思フ時ハ右証ス可キ事ヲ言渡シ審
ニ其証ス可キ慮々ニ定ム可シ

第五十一條 證據人ハ申付状ニ定メタル日ニ至

リ其場所ニ出ツ可シ右証人ハ其任所職業
姓名年齢ヲ述フヘシ且原被告人ノ親屬又ハ
姻屬ナル時ハ其等級ヲ述ヘ又其雇人ナル時
ハ其由ヲ陳述スヘシ

第五十二條 証人ハ一人ツ、原被告人ノ面
前ニ出シ裁判官之ヲ審問スヘシ原被告人証
人ニ付故障ヲ述ヘントスル時ハ其証人ノ証
ヲ述フル前ニ故障ヲ述フヘシ

第五十三條 原被告人ハ証人ノ其証ヲ述フ
ル時間辞ヲ参スヘカラス又裁判官ハ証人
ノ証ヲ述ヘ終リシ後雙方ノ者ノ求メニ從ヒ
又ハ己レノ意見ヲ以テ證據又ニ審問ヲ為ス
可シ

第五十四條 裁判官ハ訴訟ノ由テ起ル場所ニ
至ラレシノ面前ニ証人ニ審問スヘキ時
ハ其旨ヲ言渡スルヲ得可シ

第五十五條 控訴ヲ為シ得ヘキ訴訟ニ付テハ
書記官即時ニ證據ノ陳述スル所ヲ口書ニ
記スヘシ

各證據人ハ其口書ノ讀上ヲ聞キタル後之レ
ニ押印シ且裁判官書記官之レニ押印スヘシ
其後直ニ裁判ヲ為シ掛ル可シ或ハ遅リトモ
其次ノ日ニ裁判ヲ為ス可シ

第六章 裁判官土地ヲ検査スル事

第五十六條 土地ノ景状ヲ検査スル為メ又ハ
其土地ニ於テ證據人ヲ審問センカ為メ又ハ
不動産ノ價額償額ヲ計ル可キトアル時ハ裁
判官ハ原由ノ土地ヲ原被告人ノ面前ニテ自
ラ検査スヘキトヲ言渡スヘシ

第五十七條 前條ノ場合ニ於テ裁判官其土地
ニ出張スル毎ニ書記官ハ預審ノ言渡唇ヲ携
ヘ同行スヘシ

第七章 保證人ヲ呼出ス事

第五十八條 被告人裁判所へ初テ出席スル時
保證人ヲ呼出スヲ求ムル時ハ裁判官ハ保
證人ノ住所ノ遠近ニ因リ之ヲ呼出スニ相當
ノ猶預ヲ時間ヲ與ヘ裁判ノ日延ヲ為スヘシ
第五十九條 被告人ノ初テ出席スル時保證人
ヲ呼出スヲ求メス或ハ定期内ニ呼出狀ヲ
送達セサル時ハ裁判官ハ直ニ裁判ヲ為シ

12
24

ルヘシ

但シ其後保證人ヲ呼出スヲ願フ時ハ別
ニ其願ノ裁判ヲ為スヘシ

第八章 書記局要務ノ事

第六十條 書記官ハ使丁ヨリ呼出狀ヲ受取
ル毎ニ前訟ノ始末ヲ記ス可キ為メ一ノ簿冊
ヲ備置リヘシ
其簿冊ハ一枚毎ニ豎六行ニ畫シ其一行ヲ以

司法省

ヲ訴訟一件毎ノ區分トシ其行ヲ横ニ五分シ
第一分ニ番號第二分ニ原被告人ノ姓名第三
分ニ訴訟ノ種類及ヒ出訴ノ月日第四分ニ類
審ノ言渡及ヒ其月日第五分ニ裁判言渡及ヒ
其月日ヲ記ス可シ
各訴訟ノ番號、裁判言渡書及ヒ其公寫ニ書
載スヘシ

第六十一條 書記官ハ總テノ裁判言渡書ヲ管守

シ之ヲ受取りタレ順序ニ循ヒ假リニ綴リ置
キ歳終ニ至リ一冊ニ編スヘシ

且右簿冊ヲ區裁判所ノ古記藏ニ納ム可シ

右言渡書已失スルニ於テハ書記官其原被告
人ニ對シ責ヲ受クヘシ

第六十二條 書記官ハ其總テ受取ルヘキ手數
料ヲ記スルカ爲メ簿冊ヲ備ヘ置キ其部分ヲ
立テ出納ヲ審ニス可シ裁判官ハ毎月ノ終リ

ニ右簿冊ヲ検査シ計算ヲ為サシムヘシ

第六十三條 府縣裁判所ノ検査ハ前三條ノ

施行ニ注意スルコトニ任セラル可シ

右ニ依テ検査ハ何時ニテモ區裁判所ノ簿冊

及目錄公寫等ヲ點檢スルコトヲ得ヘシ

若右規則ニ違背シタルコトアルニ於テハ之ヲ

府縣裁判所ノ長ニ申立ツヘシ

第九章 裁判官渡公寫及ニ裁判執行公

寫ノ事

第六十四條 言渡公寫ハ讀合ヲ為シタル上本

書ト相違無キヤヲ記載シ書記官之ニ押印ス

ヘシ

其公寫ニハ裁判所ノ印ヲ押スヘシ

第六十五條 其公寫ノ手数料ハ其公寫ノ端ニ

記スヘシ且公寫ヲ原告被告人ニ渡ス前ニ書記

官右手手数料ノ高ヲ裁判官ニ示シ其檢印ヲ受

クヘシ

第六十六條 執行公寫ニハ其紙尾ニ裁判言渡
レノ通り使丁ヨリ之ヲ執行ヘク若シ違背ス
ル者アル時ハ使丁ヨリ警保官ニ申出テ其執
行ノ為メ警保官ヨリ巡查及ヒ番人ノ助勢ス
可キコトヲ太政大臣ヨリ指令ノ旨ヲ記載ス可
シ

第六十七條 執行公寫ハ原被告人ノ内訥詔ニ

勝チタル者ニノミ之ヲ渡スコトヲ得ヘシ

裁判言渡公寫ハ原被告人ノ差別ナリ請求ス

ル者ニ渡スコトヲ得ヘシ

第六十八條 執行公寫及ヒ言渡公寫ヲ請求ス

ル時ハ其手数料大凡勘定ヲ以テ扨記官ヘ預

ケタル後ニアラサレハ之レヲ書スヘカラ

ス

第六十九條 書記官ハ執行公寫或ハ言渡公寫

ヲ渡ス時預カリ置キタル手数料ノ過不足ヲ
精算スヘシ

第七十條 何レノ裁判言渡ニテモ執行公寫
ニ據ラサレハ巡查番人ノ助勢ヲ得ヘカラス

第十章 訴訟入費

第一節 使丁ニ納ム可キ手数料ノ事

第七十一條 使丁ニ納ムヘキ手数料ハ左ノ通り
一 呼出狀ノ本扨ヲ作り之ヲ申達シ又ハ裁

判言渡其他諸書ヲ申達スル為メニ自カ
ラ出張スル費用貳拾五錢

一 呼出狀ノ寫料ハ本書寫料ノ四分一

一 其他ノ寫料ハ一枚ニ付三錢

一 使丁裁判所ヨリ一里以外ヘ出張スル時
往返共一里毎ニ拾貳錢五厘ヲ増ス可シ

第二節 書記官ニ納ムヘキ手数料ノ事

第七十二條 書記官ニ納ムヘキ公寫ノ手数料

一枚ニ付三錢

但シ一枚ハ十六行ニシテ每行十五字詰ト

ス

第七十三條 第六十條ニ記載シタル明細表

ニ記入スル為メ手数料トシテ貳拾五錢ヲ納

ムヘシ

第七十四條 書記官出張ノ費用ハ區裁判官出

張費用高ノ三分ノ二ヲ納ム可シ

第三節 區裁判官ヘ納ムヘキ費用ノ事

第七十五條 區裁判官其裁判所ヨリ一里外ニ

出張スル時ハ往返共一里毎ニ五拾錢ノ費用

ヲ納ム可シ

第四節 証據人及ヒ鑑定人ニ渡スヘキ費

用ノ事

第七十六條 事實取調及ヒ鑑定ヲ為メニ審問

スル証據人及ヒ鑑定人ハ一日毎ニ五拾錢ノ

費用ヲ渡スヘシ又右ノモノハ一里以外ハ出
張スル時ハ往返共一里毎ニ拾貳錢五厘ヲ増
ス可シ

第五節 入費ノ精算及ヒ其拂方ノ事

第七十七條 訴訟ニ負ケタル者ニハ其雜費ヲ
拂フヘキコトヲ渡ス可シ

第七十八條 一訴訟ノ内甲ノ廬ハ原告人ノ負
ケ乙ノ廬ハ被告人ノ負ケトナル時ハ裁判官

其雜費ノ金額ヲ酌定シ各之ヲ拂フヘキコトヲ
言渡スヘシ

第七十九條 訴訟雜費ハ裁判ヲ請求スル一方
ヨリ証據トシテ凡積リノ金額ヲ書記局ニ預
ケ置カシメ裁判言渡ノ時裁判官其金額ヲ定
ム可シ

第八十條 訴訟ニ勝チタル者ハ其費用ノ明
細勘定書ヲ書記官ヘ差出ス可シ裁判官ハ右

勘定書ヲ檢査シ若シ不當ノ慮アル時ハ之ヲ
改正セシムヘシ

但シ其費用總高ハ裁判言渡書紙尾ノ餘白
ニ記載スヘシ

第八十一條 裁判執行公寫ニ右費用總高ヲ記載
セサル前ハ之ヲ言渡ス可カラヌ又執行公寫
或ハ言渡公寫ヲ願ヒ出タル日ヨリ五日ヲ過
サル時間ニ之ヲ渡ス可シ

第八十二條 訴訟雜費ハ執行公寫ニ據リ本件
ノ金額ト同時ニ之ヲ拂フヘシ

第八十三條 裁判言渡公寫ヲ受取ル手續ヲ為
シタル使丁ハ別段代人タルノ委任狀ナシト
雖モ一方ノ代人ト看做ス可シ

